

全講枕草子

池田龜鑑著

至文堂

昭和三十八年二月二十日 印刷
昭和三十八年二月二十五日 發行

全講枕草子
定価 二、五〇〇円

著者 池田 亀鑑

東京都新宿区弘方町二七

省 佐藤 正 叟

東京都北区上中里一ノ三五

省 倉沢 直 男

東京都新宿区弘方町二七

所 至 文 堂

電話九段(331)一四一五番
振替口座東京二九五〇七番

序

清少納言枕草子に関しては、はやくから北村季吟の春曙抄をはじめ、近代の関根・金子・田中諸氏の労作に至るまで、注目すべき幾多の研究業績が示された。誰かこれら先学に感謝しないでおられよう。著者も亦その学恩をうけた一人である。

三十余年前、著者がこの草子に関心を抱きはじめたのは、源氏物語諸本の研究に随伴して、この草子の諸異本の系統を明らかにすることであった。ついで高部本文批判の方法論を身につけるために、解釈に重点を置き、いわば源氏物語研究の基礎的部門として再出発した。すなわち土佐日記において、低部本文批判の理論と実践を模索するのと、相並ぶ意味のものであった。

しかし、枕草子を読めば読む程、この作品に深い興味を感じ、あのめまぐるしい歴史の激流に生きた作者に強く心を惹かれ、いつの間にか憧憬を抱くようになった。それは敗戦国に生きる苦しみにもよるであろうが、ともかく清少納言に対する同感と共鳴は、日増しに濃くなっていくことをどうすることもできなかった。こうして、尊敬すべき先学の高説や普通の清少納言観に対し、いささか見解を異にするに至った。

さて本書がこの形にまとめられるまでには、幾多の迂余曲折があった。単に専門家を対象とする学術書ならば、それはそれとして意味もあり、一つの行き方である。しかし、今著者の念願するところは、むしろ清少納言の人と作品とを、すこし異なる立場から見直したい、そして、できることなら多く

の人々に批判していただきたい、という点にある。ただ尨大な紙面を必要とする専門書と、簡明を旨とすべき参考書との性格上の矛盾を、どうして調節するか、それは本書の直面した最大の困難であった。この困難を克服するために、著者はみずからの見解に溺れることのないよう厳戒し、広く古今の諸説に聴き、その立場に対して寛容であり公平であるように努め、専門研究書の程度内容を損わず、しかも行き届いた読解指導書たり得るよう努力を払った。思いあがった言葉との謗りをうけるかもしれないが、念願とするところを率直に述べた次第である。

右のような経過を辿った本書は、稿を起してから五箇年、その間改稿また改稿、校正のたび毎に増補削除の朱筆を加え、既に校了のものにまで修正を施した。加うるに二回にわたって重症のため長期入院し、退院後も口述で更に補筆するなど、やむときなく今日に至った。刊行がおくれたのは、右の事情によるのである。このわがままは、普通では到底許されまいが、これを許し、黙々として協力された至文堂佐藤泰三氏、ならびに大同印刷株式会社当事者の寛容と労苦に対して、衷心から感謝と敬意を捧げる次第である。

昭和三十一年八月

著 者

凡 例

一本書は、清少納言枕草子を解釈し鑑賞しようとする人々のために、役立つことを念願している。

二もと専門研究書として出発したが、あまりに龐大に過ぎるので、整理を加え、辛うじてこの形に圧縮した。

三底本は、一応三卷本第一類によったが、所々他系統の本を参照した。その際、私意によって本文を改めることは厳戒し、他本の異文を挙げて参考に資した。

四章段の立て方は、もっぱら日本古典全書所収本によった。これは、現行諸本に統一がなく、研究上不便が多いので、最も広く行われている同全書本に協力しようとの考えによるものである。

五章段の立て方に関して、著者に別の見解がある場合には、その章段の内部に「……段の一」「……段の二」などと表示して分割する方法をとった。

六長文にわたる回想の記事には、新しい研究の結果を導入して再整理する必要がある場合に限り、その段の内部に右と同様の分割を試みた。

七各章段毎に主題による題目を掲げ、それを分類・回想・随筆などに大別し、更に細部の主題的註記を施した。

八本文は漢字に仮名をつけ、歴史的仮名遣に統一し、句読点を附し、適当に行を立てるなど、読解に便ならしめた。

九解釈の形式としては、釈義・文意・要説・補説の見だしによつて、出来るだけ簡潔明瞭な方法をとった。なおこれらの部分には、新仮名遣・新字体を採用した。

一〇釈義においては、「読み」のために必要な極量まで圧縮し、特に用例の参照に意を用いた。

一一文法は解釈の原理的なものとして重視したが、専門に過ぎることはこれを避けた。

三 先学の説に聴くべきものはこれを尊重し、通説と異なる卑見も併せ掲げて参考に資した。

三文意においては、逐語訳たることを旨とした。これは、原文と対照して解釈する人々への心遣いにほかならない。従つて、創作的に名訳を示す意図はなく、どこまでも原文への忠実な手引とすることを念願した。

四 要説においては、その段の主題・構想・叙述などについて要点を述べた。著者の恣意が入り込み易いので、十分警戒したつもりである。

五 補説においては、本文または構成・成立などの諸問題に言及したが、あまり専門的に過ぎぬよう厳戒し、その意図を活字の大きさによつて表わした。

六 採択本文は三卷本第一類であるが、三卷本になく、他の系統の諸本に存する本文はこれを拾録し、補遺として掲げた。

これによつて、現存枕草子の諸異文は大体集大成されたと信ずる。

七 補遺においては、読者が自らの解釈力をテストし得るよう配慮し、解釈の形式を少し変えてみた。

八 卷末に枕草子解説・関係系図・年表・索引等を収め、利用の便を計つた。

九 図録篇は、専門の技術を必要とするので、これを中村義雄氏に嘱した。

一〇 起稿以来五箇年間、たゆまぬ努力を続けてようやく成つたものであるが、なお誤りも少なくないと思われる。諸家の高教を得て漸次完全に近いものにしたいと念じている。

目次

一 四季(春は曙).....	一	五淵は.....	三六
二 ころは.....	三	六 海は.....	三六
三 正月(正月一日は).....	四	七 みささきは.....	三六
四 除目のころ.....	九	八 わたりは.....	三六
五 三月三日.....	二	九 たちは.....	三六
六 祭のころ(四月祭のころ).....	三	一〇 家は.....	三六
七 同じことなれども聞き耳異なるもの.....	六	一一 清涼殿の春(清涼殿の丑寅の隅の).....	三七
八 法師にした子(思はむ子を).....	七	一二 宣耀殿の女御(古今の草子を).....	三七
九 大進生昌.....	九	一三 宮仕論(生ひさきなく).....	三七
一〇 翁丸(上にさぶらふ御猫は).....	六	一四 さまじきもの.....	三六
一一 五節供(正月一日三月三日は).....	三	一五 たゆまるるもの.....	三六
一二 慶び申し(よろこび奏すること).....	三	一六 人にあなづらるるもの.....	三六
一三 定澄僧都(今内裏の東をば).....	三	一七 にくきもの.....	三六
一四 定澄僧都に桂なし.....	三	一八 心ときめきするもの.....	三六
一五 一山は.....	三	一九 過ぎにしかたこひしきもの.....	三七
一六 三市は.....	三	二〇 心ゆくもの.....	三七
一七 三峰は.....	三	二一 檳榔毛・網代(檳榔毛は).....	三七
一八 四原は.....	三	二二 説経の講師(説経の講師は).....	三七

説経聴聞(またたふときこと).....	壹
三 はちすの露(菩提といふ寺に).....	九
三 小白河の結縁八講(小白河といふ所は).....	八
畚 残暑の暁(七月ばかりいみじう暑ければ).....	六
畚 木の花は.....	叁
畚 池 は.....	六
毛 五月の節供(節は五月にしく月はなし).....	六
元 花の木ならぬは.....	一〇
元 鳥 は.....	一〇
畚 〇あてなるもの.....	一〇
畚 虫 は.....	一一
畚 汗の香(七月ばかりに風いたう吹きて).....	一三
畚 にげなきもの.....	一四
畚 細殿の前(細殿に人あまたゐて).....	一六
畚 主殿司.....	一六
畚 隨身.....	一七
畚 寝起きの顔(職の御曹司の西面の).....	一八
畚 馬 は.....	一三
畚 牛 は.....	一四
畚 猫 は.....	一四

畚 瘦せ型(雑色・隨身は).....	一四
畚 小舎人童.....	一五
畚 牛 飼.....	一五
畚 名対面(殿上の名対面こそ).....	一六
畚 召使の呼び方(若くよろしき男の).....	一六
畚 肥満型(若き人ちごどもなどは).....	一六
畚 遊ぶ子供(ちごはあやしき弓).....	一六
毛 中門のなか(よき家の中門あけて).....	一〇
畚 滝 は.....	一三
畚 川 は.....	一三
畚 暁の別れ(暁に帰らむ人は).....	一三
畚 橋 は.....	一三
畚 里 は.....	一三
畚 草 は.....	一六
畚 草の花は.....	一六
畚 集 は.....	一六
畚 歌の題は.....	一四
畚 おぼつかなきもの.....	一四
畚 たとしへなきもの.....	一四
夜 鳥(夜鳥どものゐて).....	一四

夏夏の夜明け(しのびたるところにありては)……………	一四四	五節の舞姫(宮の五節いださせ給ふに)……………	一九
冬の夜更け(また冬の夜いみじう寒きに)……………	一四四	谷細太刀……………	三三
古供びと(懸想人にて来たるは)……………	一四五	六五節のころ(内裏は五節のころこそ)……………	三三
古ありがたきもの……………	一四七	允楽器の名(無名といふ琵琶の御琴を)……………	三六
古細殿の局(内裏の局細殿いみじうをかし)……………	一四八	古別れば知りたりや(上の御局の御簾の前に)……………	三六
古臨時の祭の調楽(まいて臨時の祭の調楽)……………	一五〇	古ねたきもの……………	三九
古職の御曹司(職の御曹司におはしますころ)……………	一五三	古かたはらいたきもの……………	三二
古あぢなきもの……………	一五五	古あさましきもの……………	三三
古心地よげなるもの……………	一五五	古くちをしきもの……………	三四
古御仏名のまたの日……………	一五五	古ほととぎすを尋ねて(五月の御精進のほど)……………	三五
古草の庵(頭の中將のそぞろなるそら言を)……………	一五七	元輔のむすめ(二日ばかりありて)……………	三四
古梅壺の花(かへる年の二月二十余日)……………	一六〇	古秋の月の心(職におはしますころ八月十よ日)……………	三七
古瓦に松はありつや(暮れぬればまありぬ)……………	一六二	古九品蓮台の間には(御かたがた君たち)……………	三六
古めくはせ(里にまかでたるに)……………	一七〇	古海月の骨(中納言殿まゐり給ひて)……………	三六
古もののあはれ知らせ顔なるもの……………	一七五	古允信 経(雨のうちはへ降るころ)……………	三二
古なかなるをとめ(さてその左衛門の陣などに)……………	一七五	古登華殿の御まどゐ(淑景舎東宮にまゐり給ふ)……………	三四
古常陸の介(職の御曹司におはしますころ西の)……………	一七五	古早く落ちにけり(殿上より梅のみな)……………	三四
古雪の山(さて師走の十よ日のほどに)……………	一八二	古南秦の雪(二月つごもりに)……………	三四
古めでたきもの……………	一八三	古ゆくすゑはるかなるもの……………	三七
古なまめかしきもの……………	一八六	古方弘……………	三七

一〇五 見くるしきもの……………	二五〇	二四 黒戸の前(関白殿黒戸より出でさせ給ふ)……………	二九
一〇六 いひにくきもの……………	二五二	二五 雨後の秋色(九月ばかり夜ひとよ)……………	二八三
一〇七 関は……………	二五三	二六 耳無草(七日の日の若菜を)……………	二八三
一〇八 森は……………	二五三	二七 定考(二月官の司に)……………	二八四
一〇九 原は……………	二五三	二八 餅饅一包(頭の弁の御もとより)……………	二八五
一一〇 淀の渡り(四月のつごもりがたに)……………	二五四	二九 衣服の名称(などて官得はじめたる)……………	二八六
一一一 つねよりことにきこゆるもの……………	二五五	三〇 月秋と期して(故殿の御ために)……………	二八九
一一二 絵にかき劣りするもの……………	二五五	三〇 齊信の君(わざと呼びも出で)……………	二九一
一一三 かきまさりするもの……………	二五五	三一 鳥のそら音(頭の弁の職にまゐり給ひて)……………	二九三
一一四 冬と夏(冬はいみじう寒き)……………	二五五	三二 この君(五月ばかり月もなういと暗きに)……………	二九六
一一五 あはれなるもの……………	二五五	三三 椎柴の袖(円融院の御はての年)……………	二九八
一一六 正月の参籠(正月に寺にこもりたるは)……………	二五六	三四 つれづれなるもの……………	三〇三
一一七 いみじう心づきなるもの……………	二五九	三五 つれづれなぐさむもの……………	三〇三
一一八 わびしげに見ゆるもの……………	二六〇	三六 とりどころなきもの……………	三〇四
一一九 暑げなるもの……………	二六〇	三七 臨時の祭(なほめでたきこと)……………	三〇五
一二〇 はづかしきもの……………	二六二	三八 牡丹の叢(殿などのおはしまさで後)……………	三一
一二一 むとくなるもの……………	二六四	三九 山吹の花(例ならずおほせ言などもなくて)……………	三二
一二二 修法は……………	二六六	四〇 天に張り弓(童に教へられしことなどを)……………	三六
一二三 はしたなきもの……………	二六七	四一 木登り(正月十よ日のほど)……………	三九
八幡の行幸……………	二六八	四二 双六をうつ人(きよげなる男の)……………	三二

一四 碁をうつ人(碁をやむことなき人のうつとて)……………	三三	一五 昔おぼえてふようなるもの……………	三五
一三 おそろしげなるもの……………	三三	一六 たのもしげなきもの……………	三五
一三 きよしと見ゆるもの……………	三三	一六 読経は……………	三五
一四 いやしげなるもの……………	三三	一六 近うて遠きもの……………	三七
一五 胸つぶるるもの……………	三四	一六 遠くて近きもの……………	三七
一五 うつくしきもの……………	三五	一七 井は……………	三七
一五 人ばへするもの……………	三七	一八 野は……………	三八
一六 名おそろしきもの……………	三九	一八 上達部は……………	三八
一六 見るにことなることなきものの……………	三九	一九 君達は……………	三八
文字に書いてことごとしきもの……………	三〇	一九 受領は……………	三六〇
一五 むつかしげなるもの……………	三三	一九 権の守は……………	三六〇
一五 えせものところ得る折……………	三三	一九 大夫は……………	三六
一五 苦しげなるもの……………	三三	二〇 法師は……………	三六
一五 うらやましげなるもの……………	三四	二〇 女は……………	三六
一五 とくゆかしきもの……………	三七	二一 六位の藏人……………	三六
一五 ころもとなきもの……………	三八	二一 女のひとり住む家(女のひとり住むところは)……………	三六
一五 あいだところ(故殿の御服のころ)……………	三二	二二 夜中の訪問者(宮仕へ人の里なども)……………	三六
一五 人間の四月(宰相の中將齊信宣方の中將)……………	三四	二二 有明の月(あるところになにの君とかや)……………	三八
三十の期に及ばず(宰相になり給ひしころ)……………	三九	二二 雪の夜更け(雪のいと高うはあらで)……………	三八
左京のこと(弘徽殿とは)……………	三三	二二 雪月花の時(村上の前帝の御時に)……………	三七

一七 御形の宣旨……………	三三	内裏の局(内裏の局などにうちとくまじき)……………	二〇
一八 宮にはじめてまゐりたるころ……………	三三	御簾の移り香(五月の長雨のころ)……………	二一
一九 したり顔なるもの……………	三四	快速の美(ことにきらきらしからぬ男の)……………	二二
二〇 位について(位こそなほめでたきものはあれ)……………	三六	一五 島は……………	二三
二一 乳母の夫(かしこきものは)……………	三八	一六 浜は……………	二三
二二 病は……………	三九	一七 浦は……………	二三
二三 齒を病む女(十八九ばかりの人の)……………	三九	一八 森は……………	二四
二四 胸を病む女(八月ばかりに白き單)……………	三九	一九 寺は……………	二五
二五 ひとり住みの男(すぎずきしくて)……………	三九	二〇 経は……………	二五
二六 真 夏(いみじう暑き屋なかに)……………	四〇	二一 仏は……………	二五
二七 夏の宵(南ならずは東の廂の)……………	四〇	二二 ふみは……………	二六
二八 曉の大路(大路近なるところにて聞けば)……………	四一	二三 物語は……………	二七
二九 言語について(ふと心おとりとかなするものは)……………	四一	二四 陀羅尼と経(陀羅尼はあかつき)……………	二八
三〇 女のもとにて物食う男(宮仕へ人のもとに)……………	四二	二五 あそびは夜……………	二八
三一 風は……………	四二	二六 あそびわざは……………	二九
三二 秋吹く風(八九月ばかりに雨にまじりて)……………	四三	二七 舞は……………	二九
三三 木枯の風(九月つごもり十月のころ)……………	四三	二八 弾くものは……………	三〇
三四 野分のまたの日……………	四三	二九 笛は……………	三一
三五 心にくきもの……………	四六	三〇 見ものは……………	三一
三六 夜更けの参内(又おはしまし女房など)……………	四八	賀茂の臨時の祭……………	三二

行幸	四三五	三〇 入相の鐘（清水にこもりたりしに）	四五
祭のかへき	四三六	三六 むまやは	四三
三〇 五月の山里（五月ばかりなどに山里にありく）	四三三	三九 社は	四三
三〇 夏の夕べ（いみじう暑きころ）	四三四	蟻通明神	四三四
三二 五月四日の夕つかた	四三六	三〇 笛の音（一条の院をば今内裏とぞいふ）	四三六
三三 田植（賀茂へまるる道に田植うとて）	四三七	三一 御乳母（身をかへて天人などはかうやあらむ）	四三六
三三 稲刈（八月つごもり太秦にまうづとて）	四三六	雑色の藏人になりたる	四三六
三四 晩秋の月光（九月二十日あまりのほど）	四三九	三三 雪の日の若人（雪高う降りていまもなほ降るに）	四三六
三五 柴たたく香（清水などにまゐりて）	四四〇	三三 細殿の前（細殿の遣戸を）	四四〇
三六 菖蒲の残り香（五月の菖蒲の秋冬過ぐるまで）	四四〇	三三 岡は	四四〇
三七 余香（よくたきしめたるたきものの）	四四〇	三三 降るものは	四四五
三八 月夜の川（月のいと明きに川を渡れば）	四四一	三三 檜皮の雪（雪は檜皮葺いとめでたし）	四四六
三九 大きにてよきもの	四四一	三三 日は	四四六
三〇 短くてありぬべきもの	四四二	三三 月は	四四七
三三 人の家につきづきしきもの	四四二	三三 星は	四四七
三三 使者（ものへ行く道にきよげなる男の）	四四三	三三 雲は	四四八
三三 物見車（よろづのことよりもわびしげなる車に）	四四四	三三 さわがしきもの	四四九
三四 ぬれぎぬ（細殿にびんなき人なむ）	四四七	三三 ないがしろなるもの	四七〇
三五 青ざし（三条の宮におはしますころ）	四四九	三三 ことばなめげなるもの	四七〇
三六 晴れぬながめ（御乳母の大輔の命婦）	四五〇	三三 さかしきもの	四七一

二四	ただ過ぎに過ぐるもの……………	四七
二五	ことに人に知られぬもの……………	四七
二六	敬語（ふみことばなめき人こそいとにくけれ）……………	四七
二七	いみじうきたなきもの……………	四七
二八	せめておそろしきもの……………	四七
二九	たのもしきもの……………	四七
三〇	男の無情（いみじうしたてて婿取りたるに）……………	四八
三一	愛情（世のなかになはいとこゝろ憂きものは）……………	四八
三二	男性（男こそなほいとありがたくあやしき）……………	四八
三三	なさけ（よろづのことよりもなさけあるこそ）……………	四八
三四	うわさ（人のうへいふを腹立つ人こそ）……………	四八
三五	人の顔（人の顔にとりわきて）……………	四八
三六	古代の人（古代の人の指貫着たるこそ）……………	四八
三七	ひひなのすけ（十月十よかの月の）……………	四八
三八	成信の中將（成信の中將こそ人の声は）……………	四八
三九	大藏卿（大藏卿ばかり耳とき人はなし）……………	四八
四〇	うれしきもの……………	四八
四一	紙と畳（御前にて人々とも）……………	四八
四二	二条の宮（関白殿二月二十一日に）……………	四八
四三	積善寺供養（御経のことにて明日）……………	四八

三三	たふときこと……………	五九
三四	歌は……………	五〇
三五	指貫は……………	五〇
三六	狩衣は……………	五〇
三七	ひとへは……………	五一
三八	下襲は……………	五一
三九	扇の骨は……………	五一
四〇	桧扇は……………	五一
四一	神は……………	五一
四二	島は……………	五一
四三	屋は……………	五一
四四	時刻奏上（時奏するいみじうをかし）……………	五一
四五	お召しの声（日のうらうらとある屋つかた）……………	五一
四六	雨夜の訪問者（成信の中將は入道兵部卿の宮の）……………	五一
四七	月の夜のまらうど（をかしきことあはれなる）……………	五一
四八	月明（月のあかき見るばかり）……………	五一
四九	雨夜の訪問者再説（雨は心もなきものとも）……………	五一
五〇	雨の日の文（つねに文おこする人の）……………	五一
五一	後朝の文（今朝はさしも見えざりつる空の）……………	五一
五二	きらきらしきもの……………	五一

三九 雷鳴の陣（雷のいたう鳴るをりに）	五九
三〇 御屏風（坤元録の御屏風こそ）	五九
三一 真 冬（節分たがへなどして）	五九
三二 香炉峯の雪（雪のいと高う降りたるを）	五九
三三 陰陽師の小童（陰陽師のもとなる小わらはべ）	五九
三四 春のつれづれ（三月ばかり物忌しにとて）	五九
三五 月下の雪（十二月二十四日宮の御仏名の）	五九
三六 家あるじ（宮仕する人々の出で集りて）	五九
三七 見ならひするもの	五九
三八 うちとくまじきもの	五九
海の旅（日のいとうらかなるに海の面の）	五九
海女のかづき（海はなほいとゆゆしと思ふに）	五九
三九 道命阿闍梨の歌（右衛門の尉なりける者の）	五九
四〇 道綱の母の歌（小原の殿の御母上とこそは）	五九
四一 いよいよ見まく（また業平の中將のもとに）	五九
四二 草子の歌（をかしと思ふ歌を草子などに）	五九
四三 召使の賞讃（よろしき男を下衆女などの）	五九
四四 判 官（左右の衛門の尉を）	五九
四五 声明王の眠りを（大納言殿まゐり給ひて）	五九
四六 夜殿の火（僧都の御乳母のままなど）	五九

三九 母なき男（男は女親なくなりて）	五九
三〇 浜名の橋（ある女房の遠江の子なる人を）	五九
三一 走井の水（びんなきところにて）	五九
三二 伊吹の里（まことにややがては下ると）	五九
三三 一夜まさりするもの	五九
三四 火影におとるもの	五九
三五 聞きにくきもの	五九
三六 文字に書きてあるやうあらめど心得ぬもの	五九
三七 五下の心かまへてわろくてきよげに見ゆるもの	五九
三八 六女の表着は	五九
三九 七唐衣は	五九
四〇 八裳 は	五九
四一 九 汗衫は	五九
四二 織物は	五九
四三 二あやの紋は	五九
四四 三薄様色紙は	五九
四五 三硯の箱は	五九
四六 四筆 は	五九
四七 五墨 は	五九
四八 六貝 は	五九

七 櫛の箱は……………	五九	二 女はおほどかなる……………	五三
八 鏡は……………	五九	三 女のおそびは……………	五四
九 蒔絵は……………	五九	中巻末附載 夜居にまゐりたる僧を……………	五四
一〇 火桶は……………	五九	下巻末附載 一 霧は……………	五五
一一 置は……………	五九	二 いで湯は……………	五五
一二 檳榔毛はのどかにやりたる……………	五〇	三 陀羅尼は……………	五五
一三 松の木立高きところの……………	五〇	四 時は……………	五五
きよげなるわらべの髪うるはしき……………	五四	五 下簾は……………	五五
一四 宮仕へ所は……………	五四	六 目もあやなるもの……………	五五
一五 荒れたる家のよもぎ深く……………	五五	七 ものあはれ知り顔なるもの……………	五五
池あるところの月長雨のころこそ……………	五六	八 めでたきものの人の名につきていふかひなく……………	五五
一六 長谷まうでて局に居たりしに……………	五七	聞ゆる……………	五五
一七 女房のまゐりまかでは……………	五八	九 見るかひなきもの……………	五五
一八 一本……………	五九	一〇 まづしげなるもの……………	五六
一九 二跋（この草子目に見え心に思ふことを）……………	五九	一一 ほしいなきもの……………	五六
上巻末附載 一 法師は言すくななる……………	五三		
補遺 （三卷本逸文）……………			
一 よろづよりは牛飼童のなりあしくて……………	五七	二 三人の硯を引き寄せて……………	五七
二 硯きたなげに塵ばみ……………	五八	三 めづらしといふべき事にはあらねど文こそな……………	五九